

大分大学大学院 経済学研究科 同窓会誌

四極青雲会

青雲

せいうん

第十五号



大分高等商業学校講堂

目 次

大学院教育の重要性	城戸 照子	2
研究科志願者の拡大と知的資産の活用	石井まこと	2
日本の「失われた30年」を「40年」にしないために	小宮山知成	3
ご挨拶と近況報告	衛藤 晟一	4
私の定年退職後の生活	高栢 真一	4
「台湾・大甲の聖人 志賀哲太郎～生徒たちの明日を照らして～」を見て ...	小 虎	5
信頼される税理士になるために	三室くるみ	6
研究が持つ意味—初めて研究に向き合って—	黒木 陽騎	7
午年に想う	新垣 薫	7
日本での生活と学び	姚 思蕊	8
留学生活の中で学んだ「交流する勇気」	丁 芸洋	9
博士課程で学んだこと—大分で過ごした日々を振り返って— ...	王 佩萱	10
大学教員として、もう一度「学生」になってみてわかったこと ...	坂本 健成	10
四極青雲会事務局からのお願い	事 務 局	11
第15回四極青雲会総会	事 務 局	12
第26回定例会・イノベーティブ経済セミナー	事 務 局	14
第27回定例会・イノベーティブ経済セミナー	事 務 局	15
2025年度新院生の紹介	事 務 局	16
編集雑感	事 務 局	16

大学院教育の重要性

大分大学経済学部教授

城戸 照子



「四極青雲会」の皆様、会報への執筆機会を頂き、ありがとうございます。1997年に大学院経済学研究科の担当となって以来、教育（西洋経済史特研）と入試と大学院委員会委員、論文副査など研究科の業務に携わって、定年退職の春を迎えます。いままで四極青雲会にはお世話になり、ありがとうございます。ございました。

大分大学経済学研究科では、外国人留学生の割合が比較的大きいと思います。早くから春秋2回の入試（コロナ禍でのオンライン面接も）、指定校推薦制度も含め、特に現地入試による大学院進学促進に積極的に取り組んできた成果ではないでしょうか。もちろん、政府の留学生受け入れ政策の後押しもあります。いまや外国人学生40万人受

け入れ・日本人学生50万人送り出し計画が、2023年岸田内閣（当時）から提出¹され、受け入れ留学生は、2025年6月末で、すでに43万5000人に達しています²。

こうした留学生の多くは、修学後、日本で一般企業への就職を希望しています。日本学生支援機構（JASSO）の「2023（令和5）年度 外国人留学生進路状況調査結果」³によると、令和6年春に卒業した学部学生の71・6%、修士院生の66・9%、博士院生の53・7%が日本で就職しています。大学院研究科での留学生の就職支援は、今後ますます重要になると思われます。私は大学間国際交流制度によって、1984年夏から85年春まで、修士1年のときにベルギーのルーヴァン・カトリック大学で学びましたが、修士論文提出を登録するコースではありませんでした。現在、日本で学んでいる外国人大学院生の努力と意欲は、本当に素晴らしいと思います。

ドイツ再統一の難題をクリアしBrexitを乗り越えたEUの加盟諸国は、実は1987年から国境を越えた学生の国際教育交流である「エラスムス計画（Erasmus Programme）」（European Region Action Scheme for the Mobility of University Students）を成功させてきました⁴。そのために、欧州共通単位制度（ECTS）〔留学先の習得単位を

母国の大学で認定可）・国際単位移動制度（ICM）や、滞在費のEU補助金（グラント）が導入されました。短期留学のほか、2つ以上の大学（2か国以上）で学び、12ヶ月以上で主にジョイントディグリーの修士号取得を目指すENJMD（エラスムス修士）もあります。

学生の流動性を高めるのに常に肯定的なEU加盟諸国と「失われた30年」を過ごした日本で、この40年間に大学と大学院がどう変わったか、単純な比較は無意味でしょう。ただ近年、日本が留学生受け入れを拡大し、就職した外国人留学生が増えているのは確かです。EUのような包括的な政策がないからこそ、外国人大学院生のOB OGを擁する四極青雲会の活動にも、今まで以上の期待が寄せられるでしょう。四極青雲会と経済学研究科の、ますますのご発展を祈念申し上げます。

- 1 教育未来創造会議 <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/da6/giisidai.html>
- 2 出入国在留管理庁 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00057.html
- 3 日本学生支援機構 https://www.studyinJapan.go.jp/ja/_mt/2025/04/data2023s.pdf
- 4 駐日欧州連合代表部 EU MAG <https://eumag.jp/article/eujapan>

1124c/

研究科志願者の拡大と知的資産の活用

大分大学経済学部・地域経済社会教育開発センター

教授 石井まこと



28年前の1998年、川崎市にある労働安全衛生の研究機関である労働科学研究所から大分大学に赴任し、四半世紀近くの月日が過ぎました。現在、大学院では博士後期課程院生4名の指導をしています。そして29年目のこの4月からは経済学部長兼経済学研究科長として2年間務めることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

今の研究科長にとって一番の課題は、志願者の増加です。といっても人を増やせばいいというものではありません。大学院での研究は産みの苦しみもありますが、新しい知見を生み出すのも、

楽しいものではないでしょうか。修了した皆さんに是非お願いしたいのは、大学院での探究の醍醐味を周りに伝えていただくことにあります。これが一番の志願者拡大策でしょう。

これに加えて、大学として大切なのは大分県内外で行政も含む様々な社会課題に取り組む諸組織へのパイプ作りです。これら諸組織で活用、活躍できる調査・研究手法を学ぶことで、思考スキルを上げ、本人も組織も、それを支える大学も「三方よし」となることです。これまで経験したことがない少子多死社会といった変化をふまえ、安心して暮らせる地域作りとは何かを考え、地域コミュニティ再生や地域産業振興といった地域づくり課題に自分事として関わる人を増やしていく、そうした大学・大学院を目指します。

もう一点は、がらりと視点は変わりますが、経済学部の知的資産である「戦前期文献資料」の活用です。周知の通り、経済学部には1949年への改組から経済研究所（現地域経済社会教育開発センター）があります。そこには旧植民地拡大に合わせて集めた希少で貴重な資料が書庫に眠っており、慶応大をはじめ他大学の研究者が活用しています。ただ、大分大学経済学部・経済学研究科では活用されていません。是非、博士後期のドクター論文の資料として活用される方が出てくる

のを心待ちにしています。国際紛争が勃発している現代において、当時なぜ日本は領土拡張に突き進んだのか、貴重な資料からひも解く研究ができると思います。

このように、経済学研究科では、地域課題研究でも歴史研究でも、調べる探ることが面白いと考えた方に、いつでも研究へのアクセスが開かれています。是非、経済学研究科で学ぶ醍醐味をいろんな方にお伝えいただければ幸いです。

日本の「失われた30年」を「40年」にしないために

大分大学経済学部

准教授 小宮山知成



2025年4月に大分大学経済学部に着任いたしました小宮山です。前職では、化石燃料の輸入・精製・販売を主とするエネルギー企業に約30年間勤

務し、水素を中心とした新エネルギー事業に携わってまいりました。理系研究者として研究開発に従事するところから始まり、新製品の開発・設計・製作、さらには国内外への事業展開に至るまで、幅広い実務経験を積んでまいりました。

その一方で、当時の経営陣による本業回帰の方針転換や相次ぐ不祥事などを目の当たりにする中、自身が社会人として追求してきた「イノベーション」の本質を学術的に究めたいとの思いが強まりました。そこで一念発起し、実務での成果を基盤としながら業務と並行して経営学の博士号を取得したことが、今回のアカデミアへの転身につながっております。

私が産業界に身を置いた30年間は、日本のいわゆる「失われた30年」とほぼ重なります。この間、日本は国際比較における労働生産性の相対的低下やGDPの伸び悩みに直面し、1980年代まで数多く生み出してきた革新的技術や事業の創出も停滞しました。また、西洋型の経営手法を十分に咀嚼しないまま導入した結果、日本企業が本来備えていた強みを見失う場面も少なくなかったと言えるでしょう。

約30年にわたる実務経験を通じて、私なりに「なぜこのような状況に至ったのか」という問いと向き合い続けてきました。そして、このままでは日本

の停滞が「失われた40年」へと長期化しかねない―その危機感が、研究と教育の道へ進む決意をいっそう確かなものになりました。

一般に、ノーベル賞級の革新的技術は、その発見や発明から30年程度を経て社会実装に至るとされています。日本が再びイノベーションを持続的に生み出す国として世界のトップランナーの地位を取り戻すためにも、同様に30年という時間軸に立った取り組みが不可欠ではないでしょうか。もしこの見立てが妥当であるならば、今から約30年後に社会の中核を担う世代の教育に力を注ぐことこそ、遠回りに見えて最も確実かつ本質的な道であると私は考えています。

日本の経営者の能力や質が国際的に見て必ずしも高い評価を得ているとは言えない現状を踏まえると、経営学および国際経営学の教育を通じて次世代を担う学生を育成することには大きな意義があります。微力ながら、この30年間、日本でイノベーションが生まれにくかった要因や過ちを若い世代が繰り返さないよう導くことができれば、民間企業から転身した教員としてこれに勝る喜びはありません。

同様のお考えを持つ実務家出身の教員も少なくありません。その一人が、本学経済学部のOBであり大東文化大学特任教授の江崎康弘先生であると、

かねてより確信しておりましたが、このたび1月22日(木)から23日(金)にかけて、私の担当講義において学部生および大学院生を対象に特別講義をご担当いただきました(添付写真参照)。学生にとって、自らの将来を考える上で大きな示唆を得る貴重な機会になったものと確信しております。

着任からまだ一年にも満たない私に、このような執筆の機会を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。今後とも、本学経済学部の学生たちが日本の「失われた30年」を反転させ、新たな時代を切り拓く人材へと成長していきますよう、引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



ご挨拶と近況報告

前参議院議員 四極青雲会特別会員

衛藤 晟一



四極青雲会の皆様、各々の地域や立場でご活躍のことと拝察申し上げます。

私も衆議院、参議院において30年間に亘る国会議員の席を令和7年7月を以って引退する事となりました。これ迄四極青雲会の皆様には、大分県経済発展のために、国政に対する意見や、各地域におけるご要望などを機会あるごとに教えて頂きました事に心より感謝しております。

大分県内の行政をはじめ金融・保険並びに各経済界に網羅された四極会の皆様にも大変お世話になりました。重ねてお礼申し上げます。とりわけ、四極会の皆様には、大分県内だけではなく各地の経済界、行政、その他各種団体の中心メンバーとして活躍されていますので地方と国政を繋ぐパイプ役の

私としましては、皆様方から貴重な情報を教えて頂き、助けられ、国会議員としての役割を果たすことが出来ました。

国会議員を引退したと申しましたが、長年お付き合いのある福祉関係をはじめ各種団体より、顧問として協力して欲しいという要請もありまして大分、東京の往復は今後も続きそうです。大分事務所も引き続き開設していますので、四極青雲会の皆様には、これまで通りご意見を聞かせて頂いたり、お茶を飲みに寄って頂きますと嬉しい限りです。結びに四極青雲会の益々の発展と、会員皆様のご健勝を心より祈念申し上げます。近況報告とご挨拶とさせていただきます。

私の定年退職後の生活

久留米大学名誉教授

院1回生 高栢 真一



私は、一昨年の三月末に久留米大学を定年退職した。四十五年間の大学教員生活に一区切りをつける人生の大きな節目であった。今の生活はこの三月末でちょうど二年になるが、現在も客員教授として久留米大学では学部・大学院の講義を二コマ担当し、熊本県社会福祉法人では監事としての仕事をしている。社会とのわずかな繋がりである。現役時代と比較すれば、大学の運営や入試などの業務から解放され、好きに使える自由時間が増えたことで、研究三昧の生活を送れる心地よさがある一方で、当時の生活を懐かしく感じることもある。四十五年という長さが染みついているということだろう。

今回、当原稿を執筆するに当たって、定年退職後の生活を分析してみると、これまで、二つのことを無意識に心がけてきたことに気付かされた。一つ目は体の健康であり、二つ目は心の健康である。

まず、体の健康だが、私は三十歳代半ば頃から久留米大学附属病院で毎年人間ドックや定期的な健康診断を受診してきており、それは今や習慣になってしまっている。元来、体を動かすのは好きで、小学生時代から剣道、社会人になってからは水泳などをやっていたが、五十歳頃からは、大学の仕事が多くなったこともあり、時間節約のために自宅の近くでジョギングや

トレイル・ランニングを始めた。時々、家内と一緒に話をしながら走ったり、散策するのだが、一人で黙々と走るのと同じくらいに、これも楽しい。

また、心の健康については、ストレスをため込まないことを心掛けていたようである。生来的に好きなことをとことんするという性格のせい、それ以外のことに気を取られることが少ないのだが、それでも知らず知らずのうちにストレスが溜まっていることもある。体の健康のために週に四～五日ほど行っているジョギングやトレイル・ランニングなどは、私のストレス解消にも役立っており一石二鳥と言える。他にも、映画や音楽の鑑賞は学生時代からの趣味であり、自由時間の多くなった今は、ほとんど毎日鑑賞している。そして何より、私の心の健康を一番安定させてくれるのは研究活動である。現在でも相変わらず、学会や研究会で研究報告を行ったり、論文を専門誌や雑誌に投稿したりしている。なるべく、若手の先生たちの迷惑にならないようにと心がけながら。

こうして、いつも無意識に行っていることを意識的に分析してみると、私の定年退職後の生活が、どれほどこれまでの習慣によって支えられてきているのかがよく分かった。ありがたいことに、今のところは、心身ともに健康な状態のようである。

習慣になるまで好きな何かを継続し続ける。どうやらこれが今までの私であり、おそらくこれからも変わらないであろう私のドクトリンである。そして、何より、それが楽しい。定年退職後、新しいことに挑戦する人もいる中、今の私の場合、当面、これでいいかな、と思っている今日この頃である。

「台湾・大甲の聖人 志賀哲太郎」生徒たちの明日を照らして」を見て

院21回生 ペンネーム 小虎



先日、テレビ熊本のドキュメンタリードラマ「台湾・大甲の聖人 志賀哲太郎」生徒たちの明日を照らして」を見ました。

全く存じ上げなかった志賀先生の生き方に感銘を受けましたが、先人に敬意を払いその功績に光を当てる台湾と熊本の方々の姿勢にも感銘を受けました。

実は大分県関係者にも、台湾との関係の中で様々な分野で活躍された多くの先人たちがいらっしやいます。

台湾では「国父」として敬われている孫文氏の胃病の治療を行われた大分市出身の高野太吉氏、台湾に緑の革命をもたらした蓬萊米の母として有名な大分県立農学校（現三重総合高校）卒業生の末永仁氏、嘉南大圳組合（現嘉南農田水利会）課長として烏山頭ダムや嘉南大圳等の水利や農業指導等に尽力され、嘉南平原を潤し緑の革命をもたらした宇佐市出身の中島力男氏、台北工業学校（現台北科技大学）校長として工業技術の普及や人材育成に力を注いだ臼杵市出身の吉田佐次郎氏等の方々です。

「飲水思源」水を飲む者は、その源に思いを致せ」ということで、台湾の方々には県出身の先人の功績に敬意を払い、石碑を建てたり、像を作ったり、記念館等で紹介してくださったりしていますが、県内では、そういった先人の功績に光が当たることはほとんどありません。

県内にある同様のもので私が知っているものは、大分市にある高野太吉氏の顕彰碑、許文龍氏（台南市出身で奇美実業を創業され、自社を世界的企業に育て上げた一方で、芸術等に造詣が深く、素晴らしい収蔵品を持つ奇美博物館を台南市に開かれた方です。）が寄

贈してくださった、三重総合高校にある末永仁氏の胸像、テレビ大分が中島力男氏について制作したドキュメンタリー「遥かなる嘉南」水が結ぶ台湾・大分」ぐらいです。

県内ではほぼ忘れ去られています、末永仁氏と共に台中州立農事試験場等で、九州から持ち込まれた陸稲「中村」や台中で開発された「蓬萊米（台中65号）」等の栽培方法・品種の改良や栽培試験などに取り組まれた、佐伯市出身の豊田俊五郎氏や竹田市出身の藪亀孟男氏などについても台湾の公的なWEBサイト等で名簿や功績等の資料が公開されています。

また、三重農業高校の同窓会関係資料等によれば、彼らは、高地で九州と気象条件が似ていて「中村」種の栽培適地であった台北州北投庄大屯山近郊の竹子湖盆地（現陽明山国家公園内）と比べ、いもち病に弱い「中村」とっては低地で高温多湿のため栽培条件の厳しい台中州大甲郡（豊後大野市出身で大分県立農学校卒業生の甲斐登氏の任地）等で苦勞の末栽培試験を成功させました。

そう、熊本の志賀哲太郎先生の任地と同じ「大甲」です！

熊本・台湾と大分の考え方の違いなのか？とても不思議です。

一昨年、NHKの番組で県とツーリズムおおいの台湾での訪日教育旅行

の商談会の模様が放送されました。内容は、広報番組ならありだと思いますが、受信料で制作された番組と考えるとNHKに苦情電話を掛けようかと思うほどお粗末でした(初めてのお使い風な感じで、補助金不正請求や使い込み等新聞・テレビの報道が続いていたのも納得の仕事ぶりでした。税金を使って行く必要があるのか?大分県民として恥ずかしいと感じました。ある意味NHKは実態を赤裸々に放送したということなのでしょうね)。台湾の訪日教育旅行の父と呼ばれる志村學県議会議員(大分県二豊日華親善協会会長)等、長年日台交流に尽力されている方々がいらっしゃる大分県には、あんまりだと感じました。

さて、大分大学の校友等にも台湾で活躍された先輩方が何人もいらっしゃいます。

県内各地の小学校・高等小学校の教諭や校長を歴任されたのち熊本税務監督局(現熊本国税局)に勤務され管下の税務署長も務められた後、台湾総督府財務局に転勤され台南新竹等の税務課や財務局本局に勤務、さらに専売局副事務官として酒類の専売に携わられ、その後、地方理事官として高雄州岡山郡守を務められた柴田虎狼先輩(明治25年大分県立師範学校卒)、台南州教育課長や高雄州勸業課長を務められた八丁春太郎先輩(明治37年大分県立師範

学校卒、大正7年大分県師範学校教諭)、台南高等小学校教諭、第二公学校校長を務められた安部勝三郎先輩(明治37年大分県立師範学校卒)、土木局作業所(電力会社)や台南台湾製糖株式会社で活躍された荷宮賢能先輩(大正3年大分県立師範学校卒)等の方々です。

今年、四極会は101年目の新たなスタートを切られますが、大学院の同窓会である四極青雲会として、諸先輩方の功績や活動に光を当てていただけると、様々な交流が広がったり、より一層深まったりするのではと期待しています。

信頼される税理士になるために

経済学研究科経済社会政策専攻

三室くるみ



この度は、このような寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

現在、私は博士前期課程経済社会政策専攻にて、田代先生ご指導のもと租税法の学習を進めています。

私の税理士への志は、最も身近な存在である母の影響から始まりました。相続税専門の税理士として独立している母の働く姿を、私は間近に見て育ちました。特にその決意を固くしたのは、大学生の時に訪れたコロナ禍です。当時、自宅兼事務所だったため、リモート授業になり自宅で過ごす時間が長くなった私は、期せずして母の仕事に対する姿勢を深く知ることとなりました。単なる数字の計算ではない、誰かの人生に寄り添う専門家としての誇りがあることに気づき、その姿に強く憧れ、私も母のような誰かの助けになれる税理士になりたいと心から思うようになりました。そして、大学在学中から税理士試験への挑戦を始めました。大学三年生で簿記論に合格し、昨年は財務諸表論と相続税法を受験しました。無事に財務諸表論の合格を勝ち取り、現在は相続税法の合格を目指して日々机に向かっています。

税理士になるためにと入学した大学院ですが、ここでの学びは、それまでの「試験勉強」とは全く異なる視点を私に与えてくれました。条文を暗記するのではなく、判例や学説を読み解き、なぜそのルールが存在するのかという「法の趣旨」やその条文をどう解釈す

るのかを深く探究することの大切さに気づきました。最初は判例特有の言い回しや論理構成を理解することに非常に苦勞し、自分自身の知識の少なさや考えの浅さを痛感する毎日でした。しかし、租税法のゼミで税理士を志す仲間達と議論を交わし、実務経験を持つ社会人の方々からの視点を伺うことは、何にも代えがたい刺激となっています。

早いもので、大学院生活も半分が過ぎ、卒業まであと一年という節目を迎えました。これまでの時間は、自分がいかに未熟であるかを知る期間でもありましたが、同時に専門家としての「足腰」を鍛える非常に濃密な時間でもありました。残された一年間は、修士論文の完成に向けて研究をさらに深化させるとともに、目前に迫る税理士試験に向けても全力を尽くす覚悟です。この環境で学べることへの感謝を忘れず、一日一日を大切に過ごしたいと考えています。

将来の目標は、母の事務所を継ぎ、地域の方々に信頼される税理士となることです。大学院で培った多角的な思考と、母から学んだ誠実な仕事への姿勢を融合させ、どんな課題にも柔軟に対応できる専門家を目指し、残りの院生生活を駆け抜けたと思います。

研究が持つ意味―初めて 研究に向き合つて―

経済学研究科博士前期課程2年

黒木 陽騎



私は2024年3月に大分大学を卒業し、それから半年後の10月に同大学の大学院へ進学しました。思い返せば、大学での生活はすでに6年目に入ろうとしています。幼い頃の1年と、大人

になってからの1年は時間の感じ方が全然違うと言われますが、23歳の私です。すでに時間の経過の速さに驚いています。さて、私の大学院生活は残り半年の予定ですが、本稿では、大学院生として初めて本格的に研究活動に携わる中で感じたことについて述べたいと思います。

研究とは何か。正直に言えば、この問いについて真剣に考えたのは、大学院入試のときと、本稿を執筆している今くらいです。そして、この問いに對

する私なりの答えは、入試の時と今とで大きくは変化していません。その内容は、先行研究と向き合う中で、次第にその輪郭がはっきりしてきたように感じています。

研究を行う際、必ず参照するものが先行研究です。先行研究は、自らの主張を裏付ける根拠として用いられ、同様の研究がすでに行われていないかを確認したりと、さまざまな場面で活用されます。しかし、私が研究活動を通じて強く意識するようになったのは、先行研究が果たすもう一つの役割です。それは、先行研究が「バトン」としての役割を担っているという点です。現在行われている研究は、過去の膨大な研究成果の蓄積により成り立つものがあれば、たとえ未知の分野を扱う研究であっても、その研究自体が将来にわたっての先行研究となり得ます。

私自身、現在取り組んでいる研究には、先行研究があるからこそその主張もあれば、先行研究がほとんど存在しない部分も含まれています。指導教授はよく「答えの正しさではなく、論理の正しさが重要だ」とおっしゃいます。研究の結論が正しいかどうかは、時代や評価によって変わるかもしれませんが、先行研究として最も価値があるのは、その結論に至るまでの論理、すなわち思考の過程であると感じています。この過程には研究者の個性が色濃く表

れます。先行研究を分析する中で、「そのような思考の組み立て方があったのか」と感銘を受けることもしばしばあります。そのような優れた研究の蓄積が、さらに一歩進んだ研究を可能にしていることに多言は要しません。もちろん、適切な引用を行うことが前提であることは言うまでもありません。

以上を踏まえると、私にとって先行研究とは、過去から現在、そして現在から将来へと研究をつなぐバトンであり、研究とは、そのバトンを受け取り、次へとつないでいくリレーそのものだと思います。これらは、少し考えれば当然のことかもしれません。しかし、生きた時代も異なり、顔も知らないかもしれない先人たちと、先行研究を通じて思考を共有し、その思考が誰かの研究に役立つかもしれないという点に、研究の大きな魅力があると感じています。

大学院入学前、私はそのように想像することで、これから始まる研究生生活が少し楽しみになった記憶があります。そして、在籍期間が残り半年となった今も、先人の思考の秀逸さに感服する一方で、自身の研究が誰かの役に立つかもしれない、あるいは将来自分自身が役立てることになるかもしれないという期待を抱きながら、日々楽しく研究活動に取り組んでいます。

本稿は私見であり、また、私の専攻

が租税法であることを前提としたものです。これから研究に取り組もうとしている方にとって、少しでも参考になれば幸いです。

午年に想う

経済学研究科地域経営政策専攻
(MBAコース)

新垣 薫



この度は同窓会誌「青雲」への寄稿の機会を頂き、誠にありがとうございます。今年は午年ということもあり、私自身の原点である「馬」との関わりを改めて見つめ直す一年となりそうです。

私は現在、博士前期課程地域経営政策専攻にて、仲本大輔先生のご指導のもと、乗馬クラブの在り方について、研究を進めています。平日は職場と大学を往復し、休日は所属する三重町乗馬同好会で自身の騎乗レベルを維持し

ながら、三重総合高校馬術部や三重町乗馬クラブスポーツ少年団の若手とともに馬の世話に携わる日々です。研究と実務が自然に交差する環境に身を置けることに、大きな充実感を覚えています。

昨年末には、競馬界を題材にしたドラマ「ロイヤルファミリー」が放映されました。競馬の世界では、輝かしい名馬が生まれる一方で、年間数千頭の馬が、価値を見出されないまま姿を消していきます。三重町乗馬同好会では、そうした引退競走馬にセカンドキャリアの道を拓く取り組みを行っています。再調教を経て乗用馬として生まれ変わった馬たちは、県内外の乗馬クラブで新たな活躍の場を得ています。この循環を支える一員として関われることは、私にとって大きな励みです。

私の馬との関わりは、小学校二年生の時に家族とともに馬術を習い始めたのがきっかけでした。当時師事していた衛藤乗馬学校の衛藤賢二先生は、1976年モントリオール五輪総合馬術競技の日本代表選手として、日の丸を背負い戦った方でした。衛藤先生に馬と向き合う姿勢や馬術のイロハを数年間教わった後は、長らく馬とご縁のない暮らしが続いていましたが、社会人になって久しぶりに競技に出てみたところ、人馬一体の快感を思い出し、再び馬の世界に戻る意思が強まりました。

さて、乗馬と聞くと、「敷居が高い」「費用がかかる」というイメージを持たれる方も多いようです。しかし、レジャー・白書などの資料を見ても、必ずしも乗馬が突出して高額というわけではありません。むしろ、ゴルフなど他の趣味の方が、費用負担が大きい年もあります。自ら馬の世話を担うなど工夫次第で、比較的手頃に乗馬を楽しむことも可能です。私自身の実感とも一致しており、調査資料とも整合的な結果です。

また、私が幼少期に通っていた衛藤乗馬学校は、旦の原キャンパスから豊肥線で1駅の近さです。馬は決して「一部の限られた人たちに開かれた世界」ではなく、意外と身近な存在なのではないでしょうか。

しかし現実問題に目を向けますと、大分では乗馬が広く普及しているとは言えません。なぜ乗馬の認知度は高まらないのか。どうすれば馬と関わる人の輪を広げられるのか。この問いは、大学院進学前から抱き続けてきた私自身のテーマであり、修士論文に取り組み今も変わりません。仲本先生をはじめとする先生方から熱心なご指導をいただき、学んだ知識を乗馬の体験価値向上へと結びつける思索が、以前よりも深く、豊かにできるようになったと感じています。

今後も自身の課題に真摯に向き合い、

研究活動で得た知見を、未来を担う若手馬術家たちへより良い形で還元できるように努めてまいります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

日本での生活と学び

経済学研究科博士前期課程

経済社会政策専攻

姚 思蕊



私は現在、大分大学大学院経済学研究科に在籍し、日本で生活しながら研究に取り組んでいる。日本での留学生活は、学問的な成長だけでなく、日常生活を通じて多く学んだ。

日本での生活でまず印象的だったのは、人々の礼儀正しきであった。どこのお店に入っても親切にふるまってくれるのがぬくもりを感じられる。このような環境の中で生活するうちに、他者への配慮や社会の暖かさを強く意識

するようになった。また、ゴミの分別や地域のルールなど、一見細かく感じられる決まりも、社会全体を円滑に運営するために必要な仕組みであることに、日々の生活を通して実感している。最初苦手なごみの分別も好きになった。

学業面においては、日本の大学院教育の特徴として、文献読解や理論的枠組みを重視する点が重要である。授業やゼミでは、先行研究を丁寧に読み込み、自分の研究テーマをどのように位置づけるかが常に問われる。指導教員の三好先生は、研究の方向性について具体的な助言をくださる一方で、最終的な判断は学生自身に委ねられる。そのため、自主的に考え、研究を進める姿勢が強く求められると感じている。受講している授業も、先生の一方的な講壇ではなく、学生たちに積極的に討議に参加するよう設置しており、一言でいうと自分で考えることを重視している。

私の研究分野は、日本における男女間の家事労働時間の差とその要因に関するものです。このテーマを選んだ背景には、日本での生活経験が大きく影響しています。日常生活や統計資料を通じて、日本社会における性別役割分業の現状を目にする機会が多く、例えばサービス業で働いている人の大部分は女性だということです。そこで、学問的に分析したいという問題意識が生ま

れました。日本で生活しているからこそ得られる実感と、経済学的分析を結びつけることができるのは、留学生の研究にとってはとても有意義だと考えている。

また、日本での留学生活は、困難を乗り越える経験の連続である。言語の壁や文化の違いに戸惑うこともあったが、周囲の方々の支えに助けられてきた。大学の先生方や事務の方々、友人たちの温かい配慮によって、安心して学業に専念できる環境が整えられていることを心から感謝しています。

今後は、日本で学んだ研究姿勢と生活経験を生かし、社会問題に対して実証的かつ多角的にアプローチができる研究者を目指します。日本での生活と学びの困難はまだまだあると思うが、困難を克服するときと明るい未来が待っていると信じています。

留学生活の中で学んだ 「交流する勇氣」

経済学研究科博士前期課程2年

中国留学生学友会会長

ティ
芸洋

大分大学大学院に留学して一年半が過ぎた。この間、研究活動のみならず、多くの人との出会いや交流を通して、



自身の成長を強く実感している。とりわけ、言語の壁を越え、人と関わる経験は、私の留学生活の軸となった。

指導教員である山浦陽一先生のもとで参加したゼミ活動は、非常に印象深いものである。留学当初、私は大学院生でありながら学部生とともにゼミに参加する機会を与えていただいた。日本語での議論に十分対応できず、不安を抱える場面も多かったが、ゼミの仲間たちは私の状況を理解し、内容を何度も説明してくれたり、分かりやすい日本語で話しかけてくれたりした。その支えによって、次第に発言する勇氣を持てるようになった。

また、豊後大野市や安心院での田野調査にも参加し、地域住民への聞き取り調査や現地活動を経験した。調査の合間には仲間と雑談を交わし、地域の方々と直接会話する機会も多かった。私は日常生活の中で耳にした、教科書には載っていない日本語表現をスマートフォンメモ帳に記録する習慣を続けている。こうした実践的な場が、日

本語運用能力の向上に大きく寄与したと感じている。

留学生活の中で、田代浩先生との出会いも大きな支えとなった。田代先生は中国での勤務経験を持ち、中国社会に深い理解を示してくださった。私が江蘇省常州出身であると伝えると、親しく声をかけてくださり、学習や活動の面で多くの機会を与えてくださった。高新技術産業園の見学や教育に関わる交流活動に参加できたことは、視野を広げる貴重な経験となった。人とのつながりが、留学生活をより豊かなものにしてくれることを実感した出来事である。

現在は中国留学生学友会の会長として、留学生と日本人学生の交流を促進する活動にも取り組んでいる。蒼稜祭での出店、別府花火大会への参加、溝部学院との合同イベントや餃子会、多校合同の春節祭などを通じて、文化を共有する場を作ってきた。これらの活動は、留学生が地域社会と直接関わる機会であり、相互理解を深める実践の場でもある。

学業面では、日本農村に関する先行研究を読み進めながら知識を蓄積してきた。当初は中日比較研究や専攻変更も考えたが、田野調査や地域住民との交流を重ねる中で、「この地域を存続させたい」という思いに触れ、アクションリサーチとして地域振興に関わる研

究を続ける決意を固めた。研究と実践が結びついた学びは、留学生活の大きな成果である。

また、興南アジア国際交流奨学金の支援を受けたことで、経済的な不安が軽減され、学業と交流活動の双方に集中できる環境が整った。奨学金の交流会を通じて、九州各地で学ぶ多様な背景を持つ優秀な留学生と出会い、互いの経験や将来像について語り合う機会を得たことは、自身の視野を大きく広げる契機となった。このような交流の場が、留学生活をより実りあるものになっていると感じている。

最後に、これから留学を目指す後輩の皆さんに伝えたいことがある。それは、言語の壁を越えるためには「交流する勇氣」が何より重要だということである。大学院生がサークル活動に参加することに迷いもあったが、「外国人として交流のために来たのだ」と自分に言い聞かせ、水泳部に参加した。中国人は私一人であったが、その経験は大きな自信につながった。また、中国語サークルに参加し、日本人学生に中国語を教えることで、自身の日本語と中国語の両方を鍛え、文化交流を深めることができた。現在では研究室の中国人留学生にも積極的に活動参加を勧めている。

留学とは、学問を学ぶだけでなく、人と出会い、言葉を交わし、自らの世

界を広げる営みである。この一年半の経験を糧に、今後も地域と社会に向き合う研究を継続していきたい。

博士課程で学んだこと ―大分で過ごした日々を 振り返って―

経済学研究科博士後期課程

修了生 王^{オウ}佩^{ハイ}萱^{ケン}



博士課程での研究生生活を振り返ると、それは決して一直線に成果へと向かう時間ではありませんでした。研究が思うように進まない時期や、自分の力や将来について立ち止まって考え込んでしまう場面は、何度もありました。博士課程を修了した現在も、就職活動が続ける中で、先の見えない状況に向き合う日々が続いています。

博士課程で特に大変だったのは、研究そのものよりも、むしろ「先が見えない時間」と向き合い続けることだっ

たように思います。仮説がなかなか形にならず、何度も書き直しを重ねる中で、努力がすぐに成果として表れないことも多く、正直くじけそうになることもありました。そんな時でも、自分の研究や努力の意味を信じて一歩ずつ進むしかありませんでした。今振り返ると、博士課程で学んだのは、常に自信を持ち続けることではなく、迷いや不安を抱えながらも、考え続けて歩みを止めない姿勢だったのだと感じます。また、大学院で得たものは、専門知識や研究手法だけではなく、専門知識を立て、すぐに答えが出なくても考え続けること。他者の意見やデータに丁寧に向き合い、自分の考えを整理して言葉にすること。こうした日々の積み重ねが、研究を離れた今でも、物事を考えるときの大きな土台になっています。

留学生として大分で過ごした生活も、私にとって特に印象深い経験でした。調査や日常生活を通じて地方社会に触れる中で、人と人との距離の近さや、ちょっとした声かけ、細やかな気遣いに何度も助けられました。言葉や文化の違いに戸惑うこともありましたが、地域の方々との交流の中で感じた温かさは、研究生生活の緊張をほぐしてくれる、まさに支えでした。また、大都市とは違い、落ち着いた時間が流れる小さな街で生活することで、研究に向き

合うための心の余白も持つことができました。研究が行き詰まったときや、孤独を感じたときも、日常の何気ない瞬間が気持ちを落ち着け、前を向く力をくれました。大分で過ごした時間は、今振り返っても、静かで温かく、ほっとする記憶として心に残っています。

こうした経験は、指導教員の先生方の長年にわたる丁寧なご指導と、大学院という環境があつてこそ得られたものです。また、ゼミの仲間や先輩方、そして同窓会の皆様との交流を通して、励ましや学びをたくさんいただきました。この場を借りて、これまで支えてくださった先生方、そして校友同士のつながりを大切に育んでこられた同窓会の皆様に、心より感謝申し上げます。

博士課程での学びは、はつきりとした「答え」をくれるものではありませんでした。しかし、その中で迷いや不安に向き合い、立ち止まりながらも考え続ける力を身につけられたことは、今の私にとって大きな財産となっています。これから、大学院で培った考え方を大切に、自分のペースで、一步一步楽しみながら歩んでいきたいと思っています。

大学教員として、もう一度「学生」になってみて わかったこと

中村学園大学流通科学部講師

大分大学経済学研究科博士後期課程

坂本 健成



私の学問的な歩みを振り返ると、結果としていくつかの分野を行き来する形になっている。学部では商学を学び、修士課程では情報工学に触れ、博士課程では経済学部に着任した。明確なキャリア設計があつたわけではなく、その時々に関心や環境に導かれてきただけである。ただ、こうした経験を通じて、学問分野ごとに考え方や思考の進め方が驚くほど異なることを次第に意識するようになった。

博士課程に進学する以前から、私は私立大学で15年ほど教員として教育に携わってきた。学生のレポートや卒業論文の添削では、論点が定まらず、文

章の流れが追にくい文章に出会うことも少なくない。正直に言えば、「なぜこのような文章になるのだろうか」と疑問を感じる場面も多々ある。

ところが博士課程に進み、指導を受ける立場になってみると、その感覚は思いがけない形で自分自身に舞い戻ってきた。返ってくるコメントを追いながら、指摘されているのは表現の巧拙ではなく、考え方そのものの整理不足であることに気づかされた。文章が冗長であったり、主張が食い違っていたり、筋道が十分に立っていないかったりするの、思考がまだ十分に詰め切れていない結果として受け取られていたのである。

指導教員の宮町良広先生が一貫して示していたのは、「よく考えられていれば、文章は自然と簡潔で明解になる」という姿勢だったように思う。逆に言えば、文章が分かりにくいときには、その背後にある前提や推論の組み立てにどこか無理がある。文章は思考の結果であり、同時に思考の状態を映し出すものでもある。その点を繰り返し示されていたと思う。

こうした感覚は、ゼミという場全体にも共有されていた。同じゼミで学んだ同窓生たちとの議論や日常的なやり取りの中でも、「どこまで考えが詰められているか」は、文章や発言から自然と伝わってくる。分野や背景、立場の

異なる院生同士が互いの文章を読み合う時間は、自分の思考の甘さに気づかされる一方で、考えることそのものの面白さを実感できる、刺激的な経験でもあった。そうした環境を与えてくださった宮町先生、ならびに当時のゼミ生の皆さんに、この場を借りてあらためて感謝を申し上げたい。

振り返ってみると、私は教員として学生に語ってきた姿勢を、自分自身が十分に実践できていたとは言い難い。考えているつもりで考え切れていなかったことや、書いているつもりで思考の整理を先送りしていたことも少なからずあった。そのことに気づかされた経験は、少し気恥ずかしくもあったが、学び続けるという営みをあらためて見直す契機にもなった。

経済学部で過ごした時間は、考えることと書くことを切り離さずに向き合う、得がたい経験であったと思う。学び直しとは、新しい知識を得ること以上に、自分の思考の未完成さを自覚し、それと付き合い続ける過程なのかもしれない。その過程を、厳しさとか知的な充実感が同居する環境の中で経験できたことを、今は素直にありがたく感じている。

教員として過ごす中で、もう一度学生として学べたことは、想像以上に面白く刺激的であった。関心のある方にも、ぜひ味わってほしい経験である。

四極青雲会事務局からのお願い

四極青雲会事務局

院1回生 木本 英光

◆年会費の納入のお願い

四極青雲会会員の皆様で年会費を納めていない会員の方にお問い合わせがあります。年会費の納入にご協力をお願いします。

年会費及び入会金の過去5年会的納入状況を見ますと、令和3年度が154,000円、令和4年度が166,000円、令和5年度が143,000円(46名)、令和6年度が106,500円(35名)、令和7年度が1月末現在で119,000円(39名)となっており、年々減る傾向にあります。かつては年間60名ぐらいの方が納めていただいておりますが、今は40名を切るという状況になっております。

同窓会の支出の主なものは、同窓会会報の印刷代18万円、会議費約3万円、通信費・事務費約7万円、併せて約28万円が最低限必要な額です。収入は年会費と協賛金(会報の広告収入)のみです。広告収入が5万円ですので、残り23万円は年会費3,000円で約80名分の会費収入が必要となる計算です。上記の会費納入状況からすると毎年

赤字の状況が続いており、その穴埋めは、同窓会創設時以降に納入された入会金等での繰越金の取り崩しで賄ってきました。

令和4年度末では約110万円の繰越がありましたが、令和5年度はこれが84万円、令和6年度は70万円、令和7年度末では約60万円となる予定です。

支出の抑えでは、令和5年度まで実施していたセミナー等の案内の郵送をメールに替える等を行っていますが、いかにせん年会費収入が減っていることから、毎年の繰越金は減っていきま。予算規模に応じて会報の発行の在り方も検討は必要になってくると思いますが、引き続き発行できるようにご協力をお願いします。

会費の納入は、毎年総会の案内の際に納入をお願いしています。中には何年か分をまとめて納入してくださる方もいますが、このような形でも結構です。ですのでよろしくお願いします。振込先は次の通りです。

★ゆうちょ銀行(通常)…記号17250、番号23852801、名前シハスセイウンカイ

★大分銀行本店(普通)…口座6818208、口座名…四極青雲会(シハスセイウンカイ)

◆会員のメールアドレスを事務局までご連絡願います

セミナーの周知や相互連絡（住所変更等）についてはメールで行っております。現在261名の会員の住所を把握しており、うち42名のメールアドレスを把握しております。この数を増やしていきたいと思っておりますので、皆様のメールアドレスを事務局までご連絡願います。

それと住所が変わった場合もご連絡願います。

★事務局：kimoto.hidemitsu@gmail.com

◆会報「青雲」への寄稿について

会報は会員の誌上での交流の場です。是非とも続けていきたいと思っております。現在、会報への寄稿は、外部の方、教官、現役院生（留学生も含めて）、会員の方からの寄稿で構成しています。教官や院生については毎年大学にお願いして集めていただいています。特に院生からの寄稿については、本人にとっても記念となるし、院生生活の途中でのまとめみたいな内容や院を目指した動機や将来の夢みたいな内容が多く、良いことだと感じています。一方で、会員の皆さんからの寄稿を集めるのに苦労しています。毎年40名〜50名の方に文書でお願いしているところですが、寄稿者は5名前後にとどまっています。皆さんお忙しいところと思いますが、ご協力をお願いする次第です。題材は自由です。何かの時期の近況報告とか、

エッセイ等なんでも結構です。発行は毎年3月ですが、寄稿はいつでも受け付けますので、よろしく願います。寄稿は事務局までメールでご提出願います。

★事務局：kimoto.hidemitsu@gmail.com

第15回四極青雲会総会

第15回四極青雲会総会を、令和7年5月17日17時より、トキハ会館5階「カトレアの間」で開催しました。昨年からは総会会場はこのトキハ会館を利用しています。総会に16名、記念講演に25名、懇親会に23名の方が参加してくれました。

総会では、伊藤隆啓会長の挨拶の後、木本英光事務局長から令和6年度の事業報告、決算報告、会計監査報告、令和7年度事業計画（案）、予算（案）についてまとめて説明があり、会場拍手ですべての議案が承認されました。

活動報告では、第14回総会、第25回・第26回の定例会（イノベーター経済セミナー）を開催したこと、それぞれのイベントの後に懇親会を開催して交流したこと等が報告されました。令和7年度の事業計画は次の通りです。1、会員間の親睦に関する事業として、（1）総会の開催（第15回総会を令和7年5月に開催）、（2）イノベーター





ブセミナーの開催（夏と冬の開催）、
（3）懇親会の開催（各イベントごとに開催）、（4）その他（必要に応じた交流会等の開催）。2、会員名簿の作成並びに会報の発行、（1）会員名簿の整備を図る、（2）会報の発行（第15号を令和8年3月発行）。3、その他（セミナー等への参加の呼びかけ）
続いて17時半から記念講演があり、株式会社日本M&Aセンター九州支店シニアコンサルタントの仲田理氏から「昨今のM&Aの現状と事例」と題して講演をしていただきました。仲田氏は法政大学社会学部社会政策科学科卒業後2006年に株式会社ビジネスコ

ンサルタントに入社、その後札幌、新宿、東京、埼玉、福岡勤務を経て、2017年に株式会社M&Aセンターに入社となっています。株式会社M&Aセンターは1991年4月の設立、M&A仲介事業等を行っている会社で資本金40億円、社員1086名、東証プライム上場企業です。今回は伊藤会長の伝手で講演を依頼し引き受けていただきました。

講演では、事業継承の問題として、自社単独での存続が難しい時代になったこと、その理由として、後継者の不在、激化する経済環境を指摘しました。そうした中で、M&Aによる株式譲渡での第三者事業継承が注目を集め増えて来ている、といったことを資料と事例とで説明されました。

講師と演題を見て参加したという方もいて、参加者からは「興味深い」「勉強になった」等の声が聞かれ好評でした。（後掲の「講演要旨」参照）

記念講演の後18時30分から会場を移して懇親会が開催されました。冒頭、阿部万寿夫副会長の乾杯の音頭で懇親会がスタート、しばらく懇談の後、木本事務局長の進行で、講師の仲田氏を含めほとんどの参加者の方から近況報告や取り組んでいることなどの発言をいただき、大変有意義な楽しい時間となりました。

最後に、高橋幹雄副会長の締めの挨拶

拶があり、三本締めで会はお開きとなりました。総会参加の皆様、お疲れ様でした。ありがとうございました。

(記念講演要旨)

後継者不在率(全国平均)の推移をみると2011年の65・9%から2024年の52・1%と改善されているが、まだ半数以上が後継者不足ということ。大分県の後継者不在率は61・3%で全国7位と高くなっている。改善傾向の要因は、事業継承に関する官民の相談窓口が普及し、各種支援策メニューも拡充され、小規模事業者にも門戸が広がったことや事業継承の重要性が広く認知・浸透したことで経営者の意識変化が出てきていることが挙げられる。

後継者決定に至らない理由として、「候補者がまだ若い」や「候補者の能力がまだ不十分」といったことが主として挙げられている。事業継続が困難な背景として、生産労働人口の減少や社長の高齢化が挙げられている。

このような状況の中で、M&Aによる第三者継承が注目され、事業継承における割合が増加している。譲渡企業におけるM&Aのメリットとして、企業名・従業員はそのままに会社の存続が可能、新株主・経営陣を迎え後継者不在の解決、取引関係の存続、親会社との相乗効果で人材不足の解消等々が挙げられる。また、M&Aの手法では「株式譲渡」が主流となっている。そ

の他、成功事例の説明。

第26回四極青雲会定例会 —イノベータータイプ経済セミナー— として大分大学大学院経済学 究科と共催—

開催日時

令和7年2月22日(土) 17時～18時

場所

J・COMホルトホール大分 2階
サテライトキャンパスおおいだ講義室



演題

「広葉樹林でのイノベーションの歴史と未来—原木乾しいたけ産業—」

講師

国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会会長
林 浩昭氏

参加者

青雲会会員、現役院生、大学関係者等 14名

今回のイノベータータイプ経済セミナーは、四極青雲会サイドが講師を準備するということで、高橋青雲会副会長の



伝手で国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会会長の林浩昭氏に依頼して、「広葉樹林でのイノベーションの歴史と未来—原木乾しいたけ産業—」という演題で講演をしていただきました。

林氏は1960年に国東市安岐町岡子でお生まれになり、東京大学で農学博士を取得、同大学助教授を経て2004年に国東半島に戻ってきて家業を継いで農林業を営む傍ら東京大学、立命館アジア太平洋大学、大分大学などで非常勤講師を務め、また農林業関係の各種委員等を歴任されており、2013年から世界農業遺産推進協議会会長をされています。

セミナーの冒頭、大学院委員長の宮町先生から挨拶とセミナー開催の趣旨が説明され、高橋副会長から講師の紹介がありました。

講演では、ファミリーヒストリーを交えた自己紹介のあと、原木乾しいたけ生産の現状を統計データに基づいて解説されました。全国的な生産は1980年代をピークに大幅に減少したものの、大分県の減少幅は小さいため2020年代の全国シェアは4割となっている。原木乾しいたけの生産過程は、クヌギなどの原木の伐採、しいたけ菌の駒打ち、駒打ちした木を寝かせ、しいたけの発生から採取・乾燥という過程を経るが、AI選別機の導入などイノベーションが進んでいる。原木乾しい

イタケは輸入品の菌庄シイタケに比べて価格が高いため生産量は伸び悩んでいるが、クヌギ林の伐採などを通じてCO2の発生抑制に大きく貢献している。水源となるため池にはオオサンショウウオなどの希少生物が生息しており、クヌギ林とため池によって農林水産循環が実現している。といったことについてデータを示して解説するとともにユーモアあふれる説明をされました。

講演後の質疑応答では、シイタケ生産の工場化や菌庄シイタケとの差異等について意見交換が行われました。セミナーの最後に、伊藤青雲会会長から講演へのお礼と参加者への挨拶がありました。

セミナー開催にあたってご尽力いただいた宮町先生他大学の関係者の皆様、ありがとうございました。

セミナー後は18時半から大分駅前の「かんてきや大分本店」で、講師を囲んで有志で懇親会を開催しました（10名の参加）。

ご参加の皆様、お疲れ様でした。感謝申し上げます。今後も大学と連携しながらイノベティブ経済セミナーを開催していきたいと思えます。

（事務局）

第27回四極青雲会定例会 ―イノベティブ経済セミナー として大分大学大学院経済学 研究科と共催―

開催日時

令和7年8月30日（土） 17時～18時

場所

J・COMホルトホール大分 2階
サテライトキャンパスおおいの講義室
演題

「改めて学ぶ財務3表・苦手意識を克服する会計講座」



講師

大分大学総合経済学科 准教授

山根陽一氏

参加者

青雲会会員、現役院生、大学関係、
企業関係者等 25名

今回のイノベティブ経済セミナーは、一昨年・昨年に続いて、大学院主催の「ビジネスパーソンのための経営サマースクール」（計3回開催）の第1回目と兼ねて開催しました。ビジネスサマースクールということで企業や行



政等の参加者が多数参加されていました。

講師の山根先生は2023年に大分大学に着任されました。山口県出身で、中央大学商学部卒、拓殖大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学のあとシステムコンサルティング会社、明治大学専門職大学院会計専門職研究科、大阪経済法科大学経済学科、宇部工業高等学校経営情報学科などを経て現職。専門は会計学とこのことです。

セミナーの内容については、大分大学HPの記事を掲載させていただきます。

講演では、まず財務3表の体系が説明されました。具体的には、貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書の関係が示されました。また、資産、負債、純資産、収益、費用、利益などの会計用語の説明も行われました。

次に、「株式発行、銀行借入」をした場合の貸借対照表への金額の記入方法（仕分け）、その時の損益計算書とキャッシュ・フロー計算書との金額の動きなどが図解で示されました。また、「現金払い」と「後払い」により、キャッシュ・フロー計算書の記入方法が異なることも指摘されました。会計については苦手意識を持つ人もいますが、数値例を示しながら、わかりやす

く説明が行われました。

講演後には、財務3表の役割などについて、講師と参加者の間で活発な意見交換がなされました。

セミナー開催にあたってご尽力いただいた宮町先生他大学の関係者の皆様、ありがとうございました。

セミナー後は18時半からホルトホール3階のホルトガーデンにおいて、講師を囲んで有志で懇親会を開催しました(6名の参加)。

ご参加の皆様、お疲れ様でした。感謝申し上げます。今後も大学と連携しながらイノベート経済セミナーを開催していきたいと思えます。

(事務局)

2025年度 新院生のご紹介

新院生の皆様、ご入学おめでとうございます。

四極青雲会(大分大学大学院経済学研究科同窓会)として歓迎いたします。

当同窓会は現役院生も入会資格がありますので、セミナーや総会といった集まりにご参加いただき、色々な人と幅広い交流をしていただくよう期待しております。

会則等は四極会HPの青雲会ページ(下記URL)をご覧ください。

<https://www.shiwasukai.com/seiunkai/>

それでは、会員及び関係者の皆様、2025年度の新院生をご紹介します。

【2025年4月入学】

○博士前期課程(マスター) 7名
川上 穂乃璃(カワカミ ホノリ)(租税法/田代 浩ゼミ)、後藤 なな子(ゴトウ ナナコ)(租税法/田代 浩ゼミ)、佐藤 暁南(サトウ キナミ)(租税法/田代 浩ゼミ)、谷崎 悠(タニザキ ユウ)(租税法/田代 浩ゼミ)、三室 くるみ(ミムロ クルミ)(租税法/田代



浩ゼミ)、吉村 亮佑(ヨシムラ リョウスケ)(租税法/田代 浩ゼミ)、郭 爽太郎(カク ソウタロウ)(比較経営史/渡邊 博子ゼミ)

○博士後期課程(ドクター) 3名
糸永 早織(イトナガ サオリ)(労使関係論/石井 まことゼミ)、加納 裕輝(カノウ ユウキ)(自治体経営論/高島 拓哉ゼミ)、矢野 志保(ヤノ シホ)(比較経営史/渡邊 博子ゼミ)

【2025年10月入学】

○博士前期課程(マスター) 5名
蔵前 遼(クラマエリョウ)(租税法/田代 浩ゼミ)、斉藤 匠(サイトウ



タクミ)(租税法/田代 浩ゼミ)、馬莉薇(マリウエイ)(多言語社会政策論/包 聯群ゼミ)、姚 思蕊(ヤオシリイ)(福祉政策論/三好 禎之ゼミ)、閻 秋羽(エン シュウウ)(交通論/大井 尚司ゼミ)

○博士後期課程(ドクター) 1名
劉 馨濃(リュウ ケイノウ)(多言語多文化共生社会論/包 聯群ゼミ)

編集雑感

会報「青雲」第15号を発行することができました。

今回も大学の宮町先生にお願いして教官と院生数名の推薦をいただいて寄稿を依頼しました。また、会員の皆さん68名の方にご寄稿を依頼しました。宮町先生、学務係の矢田様、ご寄稿いただいた皆様には感謝しありません。ありがとうございました。

今回も会員からの寄稿集めに苦勞しました。寄稿をいただいた3名の方には深く感謝申し上げます。昨年は5名でしたので、残念です。寄稿の内容はなんでも結構です。今回の高杉さんのように定年退職後の生活というような近況報告や、こういうことがあったので報告するとか、なんでも結構です。誌ですが、よろしく願います。



上での交流を深めていきましょう。

ところで、前回の編集雑感でも私事（地域コミュニティ組織の運営）を書いたのですが、今回もその続きです。今年度の新たな取り組みとして防災活動の一環で、地震体験車の試乗体験会を行いました。これが衝撃的でした。震度7までの揺れを体験できるのと、実際の過去の地震の疑似体験（揺れの強度と実際の揺れた時間）ができるようになっていきます。私も東日本大震災と関東大震災の地震を体験しましたが、それこそ衝撃的でした。東日本大震災では震度7の強烈な揺れが2分間も続き、まさにこの世の終わりかと感じる体験でした。豊後大野市では過去震度6以上の地震経験はないので、地震の恐ろしさを身をもって体験し、身を守る行動や住宅の耐震化、家具の固定などの重要性を学ぶということ、この体験をしてもらいました。皆さんも機会があれば是非体験してみてください。きつとお役に立つと思います。

最後に、会報の発行の在り方をそろそろ検討すべき時期に来ているのではないかという話です。年会費の収入が減っていく中で、現状のような会報の発行（カラー20ページ印刷発注。80部）では、5年先にはできなくなってしまう可能性があります。現行の印刷料金は18万円ですが、将来的には年会費の納入状況から10万円ぐらいで作

成する必要に迫られます。この予算でどのような形で発行できるかを検討しなくてはなりません。

まず、発行を辞めるということは考えていません。青雲会がある限りは会報を発行していくことが前提です。その上で、表紙・裏表紙を含めて20ページを印刷するにはどうすればいいか、ということになります。発行部数については、現行は会員向け300部、大学に250部（教官と現役院生向け及び学生への広報用）、四極会本部に250部（全国支部に5部配布）としています。これをどうするか。発行部数が減れば広告料（現行はヤノメガネ）が無くなる可能性もあります。いろいろな課題がありますが、皆さんからのご意見を承りたいと思います。事務局までご連絡願います。

会報は会員の誌上での交流の場です。会員の日頃の近況報告や感じたことなどを是非文章にしていだいて、会報にご寄稿いただければと思います。会報発行は3月ですが、寄稿はいつでもいいので、文章にした都度、送っていただければありがたいです。よろしくお願います。

それと、住所の変更やメールアドレスの変更があればご連絡をお願いします。

○会報への寄稿要領

- ① 題材は自由。今の生活の様子、大学院（入学）にかかわることや思い出・体験、旅行や飲み会などのエピソードなどどのようなことでもOKです。表題はお付け願います。
- ② 寄稿者の顔写真も送ってください。
- ③ 字数は800字～1200字程度
- ④ 寄稿者名、何回生、住所、メールアドレスを表記

○寄稿及び住所変更、メールアドレスの連絡先

四極青雲会事務局（大分市城南北町1丁目6番7号）木本英光

・メールアドレス：・

kimoto.hidenitsu@gmail.com

・電話番号：・

080-11707-3936

（事務局 院1回生 木本英光）

メガネも
補聴器も

やつぱり
ヤノメガネだね

メガネと補聴器の専門家が 在籍しています

目や耳の代わりとなるメガネと補聴器。
どちらもご自身の視力や聴力の特性や状態に合わせ、
精密に検査調整し、適切に選ぶ必要があります。

大切な視力と聴力だから…

ヤノメガネには、専門知識と技能を持ち資格試験に合格した
「眼鏡作製技能士」と「認定補聴器技能者」が
いつでも対応できるよう各店に在籍しています。

最適なメガネと補聴器選びを、
ヤノメガネがお手伝いします

イメージキャラクター
春風亭昇太

メガネ・補聴器の専門店



www.yanomegane.jp